

文学博士築島裕君の「平安時代の漢文訓讀語につきての研究」に対する

授賞審査要旨

本書は平安時代の漢文の訓讀語をその遺存する古訓讀資料の精密な調査によつて全体的に再現させ、訓讀語特有の語彙ならびに語法を同時代の平仮名体文学作品の言語と比較して扱い、相互の異同を国語学的に考察し、かつ文体その他多くの点に説明を与えたものである。

全体を七章にわかつてあるが、第一章では従来の訓讀語の研究の過程をとき、それらの訓讀語の性格を原理的、外形的方面にわかつて考察している。第二章では研究資料の検討を行ない、特に日本書紀、「石山寺本大唐西域記」について古訓の特性を考察し、日本書紀の訓点では他の漢籍や続日本紀等と異なつて字音語が尠く、訓讀が多いことを指摘し、石山寺本大唐西域記も日本書紀の古訓と非常に類似した点のあることを述べている。第三章では訓法を不讀、文選讀、爛脱の三方面から説いている。不讀は置字の用法を、文選讀はその成立と語法とを説いているが、爛脱は原文に錯乱があると主張しながら原文を書直したり改変したりすることはせず訓讀をする際にその讀む順序を前後させるに止まる特殊な讀法であるとして、これを漢籍の爛脱、日本書紀の爛脱、仏書の爛脱について考察している。第四章では漢文訓讀語の語彙についてその特性を説いているが、資料として興福寺藏本「大慈恩寺三藏法師伝」の永久四年点と承徳三年点とをとりあげ、この中に含まれるすべての語彙（和訓）を助動詞、助詞その他十五種に分類し、源氏物語のすべての語彙と比較検討しながら考察を行なつてゐる。第五章では漢文訓讀語の文法を体言、用言、助動

詞、助詞にわけて、源氏物語等の仮名文学作品のそれと対照させながら考察し、また文構造についても扱っている。

第六章では漢文訓讀語と仮名文学作品との関係を比較しているが、一般に仮名文学作品の文体には作品ごとに個性があるが訓讀語には訓讀者の個性のないことを指摘し、仮名文学のうち源氏物語、土左日記、古今集仮名序、竹取物語の四作品及び和歌歌謡をとりあげ、漢文訓讀語からの影響を明らかにしている。漢文訓讀の取入れ方の程度を五段階にわけ、一は漢文訓讀文の一部分をそのまま引用したもの、二は訓讀文を基として訓讀特有語形も用いられているが和文的要素が混入しているもの、三は漢文訓讀特有語を用いてはいるが、断片的に用いただけであり、その部分の背景として特定の漢文の文献は想定されないもの、四は訓讀特有の文脈をとり入れたもの、五は言語表現上の特質は全く無いが、その素材を漢文で書かれた文献に仰いでいるものとし、それぞれについて扱っている。第七章では漢文訓讀の周辺として東大寺諷誦文、変体漢文研究の構想、訓讀史上から見た図書寮本類聚名義抄を考察している。

築島裕君は多年古經典に附せられた古訓点を調査していたが、それらによつて得た訓讀語（従来は訓点語と言われてきたが、築島君は訓讀語と改めている）を資料として精密なる考察を加えており、新らしく開拓した所が多い。訓讀資料を文献の性格に応じ、漢籍、仏典、日本書紀等に区別して扱うべきことを説き、これを具体的に実証した点や訓讀語を仮名文学作品と比較し訓讀語の特徴をより明らかにするとともに訓讀語が仮名文学に与えた影響を指摘し、仮名文学の成立や文体の研究に寄与した点など注目すべく、後者は国語史の上のみならず、文体論、文学史の上にも貢献する所が多い。もとより仮名文学の比較の場合に平安後期の訓讀語というべき慈恩寺点を中心とし、それより百五六十年以前の伊勢物語、土左日記や百年以前の源氏物語との比較を行なっているのは適切でない点もあり、その他批

判されるべき点もないではないが、全体として春日政治博士はじめ諸家によりこれまでなされてきた訓讀語の研究の上立つて新しい領域を開拓した功は大きく学問的に極めてすぐれた成果であると言える。